

## ◆ 今週のコメント

- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は、0.54(36例)で、先週(0.51 34例)に比べやや増えていますが。全国の定点当たり報告数は、0.93で、流行開始の目安となる1.0に迫っており、今後の動向に注意が必要です。行政区別では、左京区、東山区を除く9行政区から報告があります。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、12.80(512例)で、6週連続で増加しています。2歳ごとの年齢群別割合では、2～3歳 25.6%(131例)、0～1歳 22.9%(117例)、4～5歳 17.0%(87例)の順に多くなっています。京都市衛生環境研究所に搬入された感染性胃腸炎の検体から、ノロウイルスG1, G2を検出しています。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は、1.80(72例)で、先週に比べ減少したものの、過去5年平均値を大きく上回っています。年齢階級別では、2歳が25例(34.7%)、次いで1歳が12例(16.7%)となっています。
- ・ 伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.38(15例)で、第33週(8月16日～8月22日)以降、過去5年平均値を上回る状態が続いています。本市では、4～5年ごとの流行周期がみられ、前回の流行(平成18年)から4年以上が経過しています。今後の動向に注意してください。

## ◆ 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

RSウイルス感染症の定点当たり報告数は、1.10(44例)で、第44週(11月1日～11月7日)以降、過去5年平均値を大きく上回る状態が継続しています。詳細をトピックスに掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数把握の感染症

- ・ 五類:クロイツフェルト・ヤコブ病(孤発性) 1例(第46週分)【1月以降の累積報告数 3例】

### 定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.54	36
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	12.80	512
	② 水痘	1.80	72
	③ RSウイルス感染症	1.10	44
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.83	33
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.65	26
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

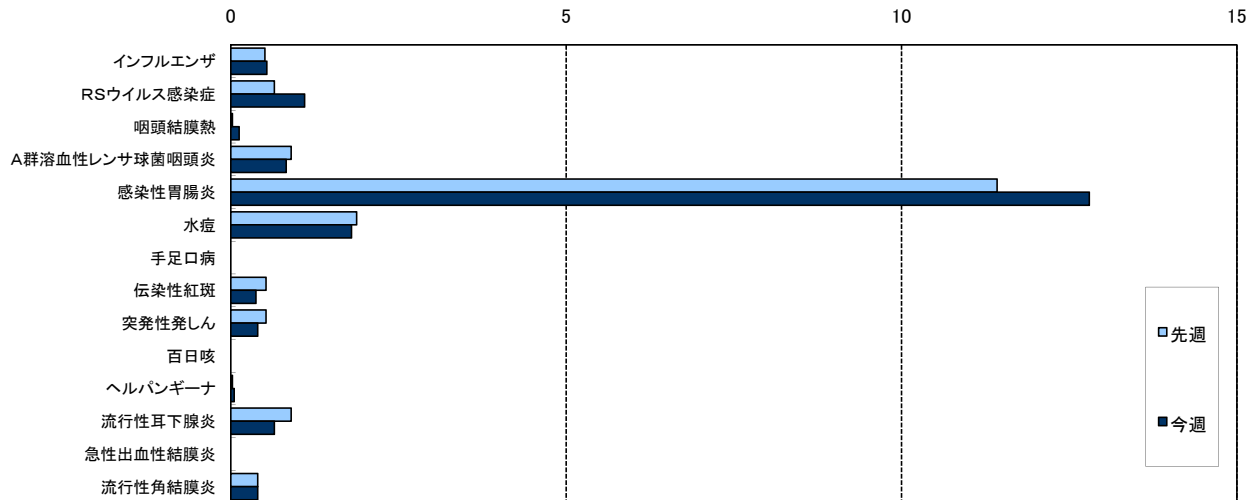
## 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

(注) 京都市のデータは、平成22年12月16日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

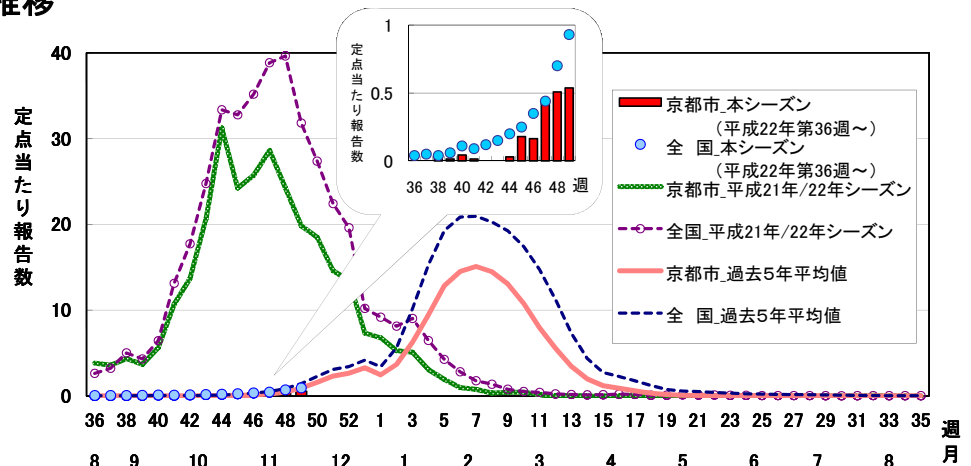
# ◆ 発生状況の概況グラフ

## 1 今週(第49週)と先週(第48週)の定点当たり報告数の比較



## 2 インフルエンザの推移

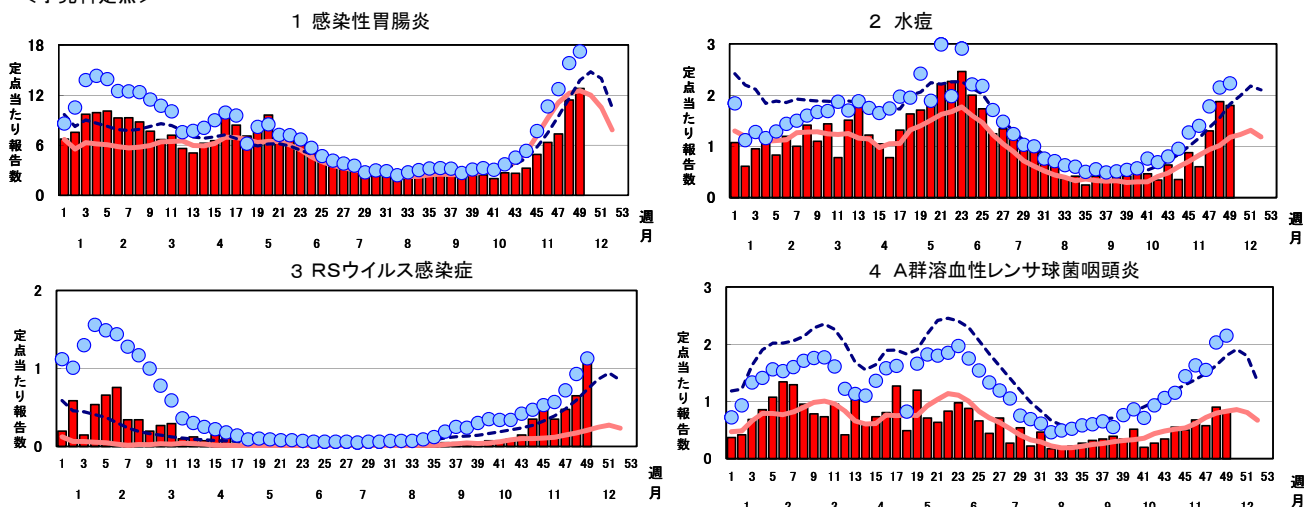
週	報告数(例)
第45週	12
第46週	11
第47週	29
第48週	34
第49週	36
累積報告数 (第36週以降)	132



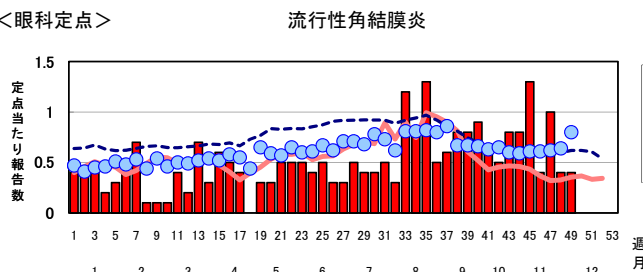
※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

## 3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



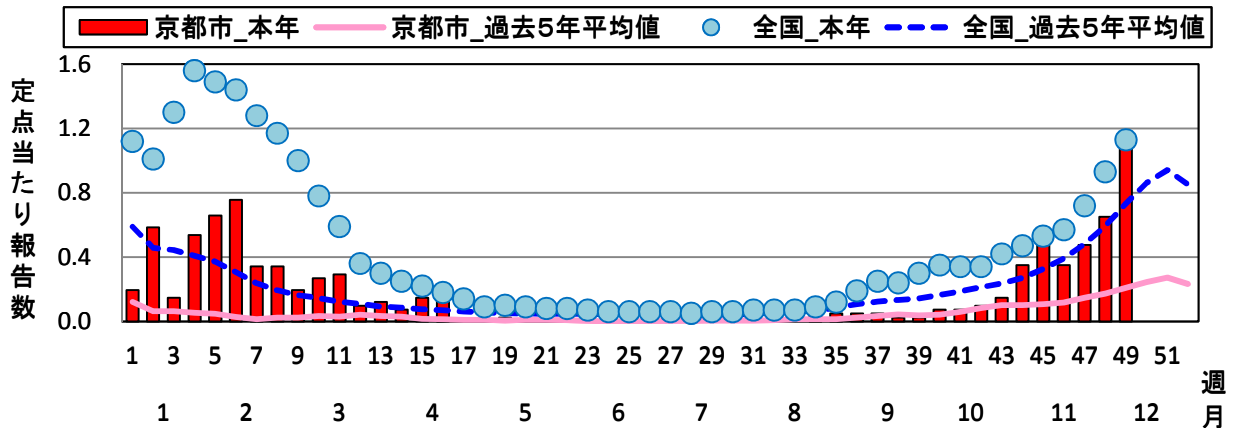
# 第49週(12月6日～12月12日)トピックス: <RSウイルス感染症>

RSウイルス感染症の定点当たり報告数は1.10(44例)で、第44週以降、過去5年平均値を大きく上回る状態が継続しており、感染症法に基づく届出の対象となった平成15年11月(第45週)以降、最も多い報告数となっています。近年、報告数は増加傾向にあり、今後の動向に注意が必要です。

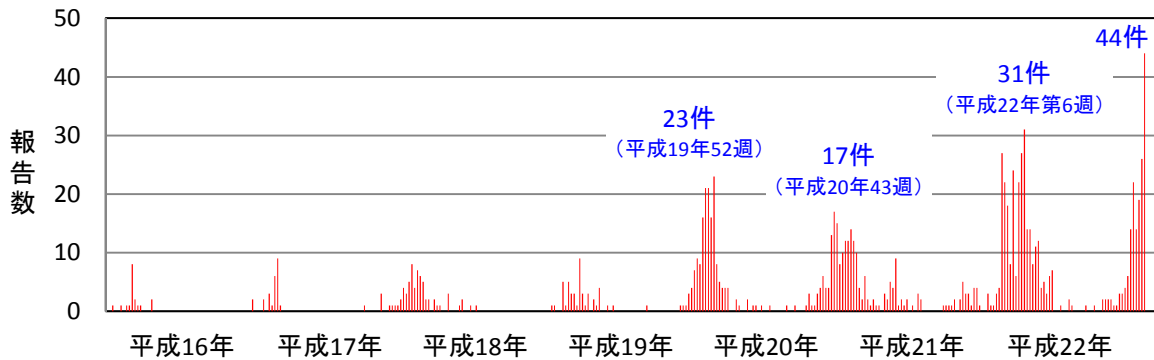
年齢階級別では、重症化しやすい5箇月以下が7例(15.9%)で、6～11箇月 7例(15.9%)、1歳 15例(34.1%)、2歳 5例、3歳以上 10例となっています。過去5年間と比べると、3歳以上の占める割合がやや大きくなっています。

京都市衛生環境研究所において、病原体定点からのかぜ症候群の検体を検査した結果、RSウイルスも3件(11月以降)分離されています。

### 本市及び全国の定点当たり報告数の推移



### 本市の平成15年(第45週)以降の報告数の推移



### 年齢階級別割合

